

学恩逸脱の徒：さようなら先生

川満, 信一 / Kawamitsu, Shinichi

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

72

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

1996-02-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002658>

学恩逸脱の徒

— さようなら先生 —

川 満 信 一

〈1〉

訃報を聞いたとき、思わずことばがやってきた。「先生、やっと楽になりましたね」
永い闘病生活もさることながら、あの「沖縄戦」以来の、心の暗闘は、傍目にも痛々しいものがあつた

槍のごと頸動脈につきささる

弾痕のある命いとほしむ

わが命つづく限りは血のしみし

あとをたづねてとぶらひ行かむ

頸動脈すれすれに刺さり、肉の中に埋まりこんでしまった艦砲弾の破片は、結局、剔出手術もできないまま、冥土まで持ち行くことになったのであろう。

底知れない悔恨に苛まれ、血の染みた戦跡をとぶらいさ迷う、夜な夜なの苦行からも、どうやら解放されたのだ。

「先生、やっと楽になりましたね」

しかし、白巾で顔を被った師の、小さくなった亡骸の前に、香をたこうと跪いた時、「楽になりましたね」という弔いの思いはどこかに消え、たくさんの感慨がどっと溢れてきた。

死別していくものとの間に、長年縊られた思いの綾織は、いきおい、ほぐしようもなく、胸がつかえるばかりだ。

掌を合わせ、溢れるものをのみこむと、「すみません、すみません」と、ことばがせりあがってきた。いち時に噴き上がった感慨の根っこには、どうやら師に対する申し訳なさ、お詫びの思いがあるようだ。

小学校から大学まで、師と仰ぐ方々は何人かおられる。それらの師に対しても、こもごもの懐いはあるが、有難いと頭は下がっても「すみません」という自己苛責の気持は湧いてこない。

たとえば、同じく琉球大学国文学科でお世話になった嘉味田宗栄教授（故人）のことを思い出す。

嘉味田先生は、私たちが入学した一九五二年の同時期に赴任され、「琉大文芸部」の初期顧問として、いち早く親しんだ。

那覇軍港の夜間アルバイトで得た小銭で、焼酎の一升瓶を求め、先輩のMと深夜、師の宅を急襲し、明け方まで文学談義に酔っぱらうなど、幾度かご迷惑をかけた。

嘉味田先生もガンで苦しんで、早々と逝かれた。お別れの時は、ただひたすら悲しかった。

それにしても、仲宗根先生の仏前で「すみません」という思いに集約された、複雑な感慨を抱くことになったのは、どういいうわれか。いや、この思いは、師の逝去をきっかけに起きてきたものではない。ずっとまえから、私の中に巣くっていて、苛立たしさを引き寄せたり、泥酔へ誘ったり、とにかく、理性的な平常の行為から逸脱させる動機の一つになっていたものだ。

ふりかえると、状況という騒々しさに身をゆだねた、言い訳づくめの不徳なやからが、忘恩の鏡に愚鈍な表情を映している。そしてまた、荒涼とした不毛の風景を展げている。

「すみません」、どうもその根因は、沖縄の戦後思想の経緯にも深くかわり、また、私自身の倫理形成のあやふやさにもあるように思えてならない。

〈2〉

高校を卒業する際、学友たちに合わせて、一応、琉大に受験はしたものの、家計がひどすぎて大学

に行くつもりなどなかった。

ともかく沖縄へ渡り、景気の良い軍作業にありつくつもりで、受験終了の翌日に発ち、中部の米軍基地の周囲を、何日かほつき廻っていた。

そんなある日、シマの先輩M氏が、那覇市の知人宅で行き合わせ、「合格発表になっているのに、なぜ学校へ来ないんだ。登録締め切りは明日までだぞ」と促がした。「大学に行くつもりはないよ」というと、「アルバイトで寄宿舎の飯は安あがりに食っていけるから、とにかく籍だけは置いていた方がいいよ」という。学生優待で、軍作業の口も見つかりやすい、とすすめられて、それならば、とコンセット寮へころがりこんだ。

琉大の沿革史では、「本専攻は一九五二年（昭二七）、新学則が制定された際に語学部国語専攻として発足した。」と記され、どこにも「国文科」という呼称は見あたらない。「一九五〇年（昭二五）開学当時、師範化に日本文学担当教官として中村龍人一人が所属していたが、学科として発足に際して嘉味田宗栄が同年四月着任、翌一九五三年（昭二八）十月に仲宗根政善、一九五四年（昭二九）四月に湧上元雄と中今信、一九五五年（昭三〇）四月に比嘉龜盛が着任、ようやくこの年、学科として形式内容とも整ったのである。」（『琉球大学三十年史』）という記述からみると、仲宗根先生との出会いは、二年生の頃ということになるが、当時、軍作業アルバイト専業、単位取得副業という実情だったので、記憶はセピア色の彼方にかすんでいる。

授業で記憶に残っているのは、仲宗根先生の〈服部言語学〉と、嘉味田先生の〈時枝言語学〉の比較対比だが、橋本文法さえろくすっぽ消化していない状態だったから、恐らくまともな理解など望むべくもなかった。ただ、凄く新しい学問の世界の奥座敷を垣間見た思いで、新鮮な感動を覚えたことだけは確かである。

また、恥ずかしい話だが、たしか四年生の頃、国文学演習の教室で、仲宗根先生を前に、そのころ生かじりしていた社会主義リアリズム論のようなものを、やれルカーチだ、蔵原惟人だ、佐々木基一がどうのと、二時間ばかりもしゃべっていた記憶がある。

『琉大文学』というクラブ誌に、今なら顔に火のつきそうな文章の端切れを書いて、なにかしら一人前を気取っていた愚かな青春が、いまさらのように悔やまれるのである。

「国語学」の指導を受けながら、とんでもないところへ脱線し、学問の外道を歩いてしまったことは、かえすがえすも師に申し訳ない思いがしてならない。

手元に懐かしい一葉の写真がある。先生が学部の中を引きつれて、郷里の今帰仁を訪ね、松の巨木に囲われた馬場らしき広場で、車座になって弁当を広げている時のスナップである。

すでにその頃、先生はひっ生の事業である『今帰仁方言辞典』のフィールド作業の最中におられたはずだ。首の傷をかばうための、不自然な動作と、方言の発音をくり返すうちに、くせになったらしい口元の動きが、強い印象を残した。

方言については、忘れられない思いが残っている。一九七〇年代末ごろか、宮古の方言について話がおよんだ時、「伊波（普猷）先生のP音考に従えば、宮古の方言は古層ということになるはずだが、調べたところどうも新しいようだね」と、首を傾げておられた。

その時も「地域、地域の方言に古層と新層が混ざっているんじゃないですかね」と、生意気なうけ答えをしたように覚えている。

それならば、自分の出生言語である、その宮古方言の、古層と新層の分析をして、学問らしい成果をもっておこたえしなければならぬはずだが、如何せん、脱線した者は、脱線の彼方へと走り続けるしかないだろう。

〈3〉

先生は、琉大の旧図書館から、志喜屋記念図書館にかけて館長を兼任されておられた。

旧図書館の頃、先生のはからいで、夜間貸し出しのアルバイトにありつけたのは、私にとって天恵であった。

旧図書館は、一九五〇年（昭二五）四月に落成した七十六坪の、木造瓦ぶき平屋建であった。「下駄割り坂」と呼ばれたキャンパス入口の坂を登りつめた右手に、放送局と隣り合って建っていた。

一九五四年、三年生の頃か、それまでは図書館の夜間利用は出来なかったが、先生が館長になられ

てから、夜間も開館することになり、図書貸し出し係として、私を世話して下さった。職員はおらず、夜十時半ごろまで開けたように思う。

夏の間は、夕涼みがてらの寮生や、逢引きの学生たちが利用したが、冬に入ると利用者は二、三人全く一人も来ない日も多かった。閲覧室は人気がなくて寒いので、八時ごろには空になった。だから毎晩一人で図書館を独占しているようなものだった。

その頃の蔵書は三万冊余で、アメリカやハワイから寄贈された洋書が、かなりの冊数を占めていたが、貧弱な語学力では手が出せなかった。

二、三月になると、誰もいないがらんだこの図書館は、冷えこみがひどかった。寒いと聴覚が鋭くなる。明りを消した背後の書庫の方から、かすかなもの音がして、おや、と耳をすますと静まりかえっている。

照明をつけて書庫を一巡して戻り、本を読んでいると、また、ものをこするような音が聴こえる。耳をすますとないにも聞こえない。

繰り返すうちに、妖しげな思いが湧いてきた。首里のこのあたりは、日、米の攻防が激しく、多くの戦死者があったはずだ。すると書庫のもの音は、うごめき出した兵隊たちの亡霊?! 冷や水をかぶったように総毛だち、読みさしの本を机に叩きつけて、閲覧室の照明の下へ躍り出た。足で床を踏み、大きく咳ばらいして気を鎮めながら、南部の壕の闇の中や、山中で、累々とした腐らん死体を押しの

け、極限を生きぬいてきた仲宗根先生やひめゆり学徒たちのことを思い浮かべた。

臆病な妄想で一人芝居を演じている自分を苦笑し、胸や首筋をばんばん叩くと、やっと落ち着きを取り戻し、「亡霊になってもなお本を読みたいんなら貸し出してあげてもいいじゃないか」と机へ戻った。

一九八八年になって、仲宗根先生がノートに書きためてあった短歌を、出版しようと琉大教授の仲程昌徳氏から持ちかけられ、手がきのままの複写版で、沖縄タイムス社から『蚊帳のホタル』というタイトルで出版した。

その中に、重傷患者と一緒に第一外科壕に残した石川清子（戦死）について詠んだ二首があり、冬の図書館の体験を、切ない思いで反すうした。

置き去られ屍のなかにあかりともし

ふみ読みたる乙めごあはれ

友のむくろかさなる中に傷つける

乙めご一人^{とも}點火し書を読む

在学中、米軍の強制土地接收があり、伊江島、伊佐浜の農民たちと一緒にあって、武装兵に立ち向かう闘争をしたり、山里永吉の小説「塵境」に、戦争の傷痕が全くと苛立たしく食ってかかったりしたが、その心理的背景には、身近かな師の「こうして生きのびた生命の底には、悲しみが深淵のようにたたえられている。天地のはじまりからの悲しみも。」（『沖縄の悲劇』）という戦争の極限体験の重さと、はけ口のない苛立ちが投影していたように思える。

〈4〉

私は一九五六年四月に無事卒業したが、本館前広場に腰掛を並べた炎天下の卒業式も、当時としては当たり前感覚だった。

また、県内の教育態勢もほぼ整い、卒業前後には、各地の中学、高校の校長たちが、わざわざ大学まで来て、「ぜひ、わたしどもの学校に赴任して欲しい」と、引っぱり合いだった。そのことも、現在の就職競争の状況からは想像し難いことである。

しかし、いざ卒業となると、在学中ろくな勉強もしなかったことが悔やまれた。引き続き大学の図書館を利用したいと考え、その条件にもっとも適した首里高校の定時制を赴任先に選んだ。

ところが、人民党の瀬長亀次郎氏が那覇市長に当選し、そのころ、沖縄タイムスの司法記者をしていた比嘉学兄が、市役所総務部長に引き抜かれた。中央大学法科を卒業してきた学兄は、バリバリの

オルガナイザーで、新聞社に労働組合を組織するため工作していたが、彼から呼び出されて「おまえ、後を引き継いで、Aらと協力して労組をつくれ」と、半ば命令的に言いつけられた。

崇元寺近くのタイムス社をたずねると、編集局長応接間で、二十分ほど国際、国内情勢について、それとない質疑応答があったあと、早速、明日からでも出勤せよ、ということになった。

しかし、学校の方は、四月にならないと新卒の教員補充がきかない。結局、四月までの半年間は、昼は新聞記者、夜は教壇というかけ持ちになった。

両方から給料をもらったのかどうか、さっぱり思い出せない。もらったとしても、どうせ桜坂か栄町の浮ついた愚かな青春の花火と消えたはずだ。

経済観念のからっきししない、衝動性人間として、家計を支える基盤もないうちに、結婚する羽目になった。

そしてまた、仲宗根先生ご夫妻のご厄介になる。

那覇市松尾にできた岸本会館は、現在の多目的ホールのはしりだった。先生ご夫妻を媒酌人に、ブンキンシマダの結婚式である。自分の意志で押し切れない性格の弱さを痛感した。ステージでは、ロシア民謡や、労働歌で肩組み合っただけのはしやぎ。いま考えると、ぞっとする思いである。

わが命つづく限りは血のしみし

あとをたずねてとぶらひ行かむ

浮かれる者たちを前に、静かに眼を伏せた先生の面影が思い出される。

「戦後はじめてある生徒の結婚式によばれた。美しい花嫁姿を見ていると、つい摩文仁のひめゆりの塔が目についた。そしてみめうるわしかった乙女らの顔がつぎつぎと浮かんできた。花かげの静けさのように、はしゃぎまわっている宴会場で静かにしている私は、ふと杯さかずきをさされてわれに戻った。よろこびのかげに悲しみがひそんでいた。しかしその悲しみは決してよろこびをうち消しはしなかった。深い悲しみに根をさしたよろこびがわいてきた。過去への悲しい追憶は、黒い大地に根を下ろしている樹木のように、決して枝葉に出る明るさ、美しさをそこなわなかった。花嫁姿を見つめていて、かえって他人の感じ得ない深いよろこびを自分は感じていた。不吉の思い出が、よろこびを消すことはしばしば経験することだが、花嫁を見ていると、私は秋日のような光が心の底からさしてくるようなかんじがしたのである。永遠に去った乙女らが、身近に生きていて、自分の血液の中にあたたかく流れているように感じられた。」（『沖縄の悲劇』）

媒酌の労に対するいかほどの謝礼もできず、労組結成の責任を負って、宮古支局創設へとばされ、その後も支局廻りをしているうちに、結婚もいつしか破綻し、先生ご夫妻にまともに顔向けもならず、お詫びをのみこんだまま、白巾に被われた師の亡骸に掌を合わせるようになった。

〈5〉

ことばが、その言霊性を失い、流行語になってカラコロと空廻りする現象は、なによりも嫌なことである。かつて、岡倉天心のアジアは一つ、という文化認識が、「大東亜共栄圏」という政治の概念となって流行したように、ことばの発生した胎内の深みが見失われたとき、空虚な響きの流行語がカラ廻りをしだす。

一つ思想、一つのことばは、濃縮された体験のエキスである。そのことばを誕生させるまでに、ひとはどのような死の淵をさ迷ってくるのか。意味のあることばの背後には、常に身命を賭して、死の淵をのぞいたものの戦きがある。

「…人間の個々の力はこの戦いの前にはほとんどゼロに近かった。

生きるも死ぬも、ただ偶然であり、ぎょうこうであった。(略)ただ運命という針ほどの細い軸にささえられて生きのびているのである。こうして生きのびた生命の底には、悲しみが深淵のようにたたえられている。」(『沖縄の悲劇』)

ここにはもう、どんなことばも意味をもつことのできない、静かだが厳とした、拒絶の沈黙領域が見える。

現実の方からのことばも寄せつけないが、あえて現実に対してもことばを発しない。いや、仲宗根

先生の心的な現実とは、いつでも、

夕焼たち茅のもえてしかばねの
うずもる野べに一人たたずむ

乙女ごよよみがへり来よ白波の
寄する磯べによみがへり来よ

というところに釘づけされている。

米軍の横暴な占領政策や、基地の強化、日本の自衛隊強化といった激動の七〇年代においても、現実に向けられたそのことばは、

いかりにはこの身はたえでしのびしのび
細き命を生きて来にける

口に出し言へばそらぞらし

戦の思ひは心の底に沈みて

マスコミをむげに断るかたくなも

心の重みたえがたくして

といったように、心の現実へ立ち入らせまいとする拒絶の姿勢をかたくなに保っている。
短歌という表現の、傾斜しがちな叙情性ということを念頭におくとしても、

日の丸の旗もあがらず爆音の
とどろきわたる復帰のあさけ

沖縄のいくさをへにし身にしあれば

などかなじまぬ国旗、君が代

叙勲の報すなほにはなれず

戦に失せし乙女の姿浮びて

といった情況歌の、深い憤りさえ浄化してしまったような、現実を遠ざけるまなざしは、散文の論理的荒々しさに対比すると、ひどく消極的な印象である。

かといって、仲宗根先生が、鉢巻きを締め「ヌチドゥタカラ」と、叫び廻ったとしたら、どうであつたらう。

際限ない欲望の増殖を正当な倫理基盤とし、公認された詐欺の論法を至上として、大手をふって展開されてきたのが、いわゆるバブル繁栄という、政治、経済の実態だった。

舌先三寸で詐偽まがい金稼ぎをしても、巨大な企業組織の下で、尤もらしい理論武装で身を飾っても、所詮は暴走する欲望のルールを突走っている。

暴走する欲望を正当化する国際、国内法の諸制度を当然のものとしながら、「平和を守ろう」とか「ヌチドゥタカラ」をおおむがえしている現実には、悲惨の限りではないか。

古代から世の指導者、聖人たちが精魂をかたむけて示そうとした道しるべは、常に欲望をいかに抑制し、足るを知る状態にコントロールするか、ということだったと思う。

日本の、われわれのバブル経済に象徴される基本倫理観は、全くその逆へ向けられてきた。いかに他人をだますか、だます才能が一番すぐれた才能である、といわんばかりの暗黙の了解が成り立ってしまった。先生が「沖縄戦の体験を風化させてはならない」と悲痛な叫びのように記したことも、

このような状況下では、いやでも風化をまぬがれることは出来ない。

そのために、現実へ向き合うと、どうしても精神は、荒地に行く散文のいばらになってしまう。

鉢巻き締めて「ヌチドウタカラ」と、空疎なやり概念を叫ぶより、乙女たちの魂が累々とひしめく暗い死の淵を、心の現実として見つめ続けた師の、戦後の生き方は、むしろ良しとすべきかも知れない。

出来れば、戦前、戦時下の皇国教師として、生徒たちにどのような尽忠報国のイデオロギーを指導したのか、散文的リアリズムの自己断罪も、と思うのだが、しよくさい贖罪と祈りの中で静かな優しさを生きた師の魂に、あえて喧噪を持ちこむ愚は避けねばなるまい。

誰だって、完べきに、非のうちどころなく生きることが不可能なのだから…。

さようなら先生

一九九五年七月二十七日

※稿中の短歌は『蚊帳のホタル』より。